

巻頭によせて



校長 北村 聡

Kitamura Satoshi

少なくとも明治維新以来、日本人はそもそも混然とした文化の中にある。明治政府は新制度と構築するにあたって、諸外国の長所を取り入れようとした。海軍はイギリス式、陸軍はドイツ式、警察組織と民法典はフランス式、医学はドイツ式（私どもが子供の頃、お医者さんはカルテをドイツ語の筆記体文字ですらすらと書いていた）といった具合であり、鉄道駅の歩廊など、これも見るからにイギリス式である（初期の北海道はアメリカ式）。

漱石を始め歴史上多くの人たちが、これに悩み、考えた。日本文化と維新以来の外来文化についてである。

司馬遼太郎は「私が七歳の頃、大阪・心斎橋の大丸百貨店のエレベーターの前で、ていねいに草履をぬいで中に入ってゆく老婦人を見た」「日本では、はきものをぬぐことのほうが、相手に対する礼儀ですな」（※注）と述べている。新幹線で、座れば靴をぬぐ人もいる。学校や診療所などでもいわゆる二足制を敷いているところもある。

永年、「和式・和様」と区別して、洋服、洋食、洋傘、洋鞆、洋髪、洋間、洋画、洋楽、洋裁、洋菓子、洋紙、洋書などと称した。中には今となっては懐かしく、日常ではほとんど使用されないものもある。「洋式」がすっかり生活に溶け込んできたのである。

江戸以前にしても、日本人は「かなもじ」や「神仏習合」に代表されるごとく、柔軟に多様なものを受け入れる民族である。様々な文化を受け入れて消化し、異文化理解、人類共存の精神が身につけているところの、いかにも「平和的」文化に根ざした民族なのである。

日本人はこの一面について、もっと世界に誇ってもよいと思う。どこの国にせよ、先祖が育んできた歴史的存在としての自国の伝統や文化を誇りに思わないものは浅はかである。自国を愛するというのが、排外主義につながると危惧する考えは誤りである。時の政治がどうのという問題ではない。

「よきを採りあしきを捨てて外国(とつくに)に 劣らぬ国となす由もがな」
明治天皇御製

※注 司馬遼太郎著「風塵抄」1991年 中央公論社